

特 別  
A4  
8099  
8(1)



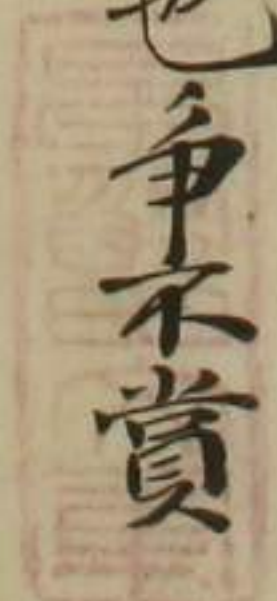


新古今和歌集序



史和哥老群德之祖百福之宗也玄象天成力際之情  
之義未著素穆地靜三十一字之詠甫與尔来源流定  
繁長短雖吳或抑下情而達國或宣上德而致化  
或屬遊宴而書懷或採艷色而寄言誠是理世撫  
民之鴻微賞心樂事之龜鑑也是以聖代明時集  
而錄之各窮精微何以漏脫然猶崑嶺之玉採之有  
餘鄧林之枝伐之無存物既如此哥亦宜然仍詔衆議  
右夷門舊源規後通貝大苑以藤原躬良有家老近清  
持中将藤原朝臣定家前上經介存原朝家隆九近

清權少得存系約臣雅純等不擇貴賤高下令撰錦  
句玉章神助之詞佛陀之作力表希夷雜而同錄而  
同曩昔迄于當時以此總編各俾呈進每至玄圃祀芳  
之朝瑣砌風涼之夕斟那波津之遺流乃漢卷山之芳  
燭或吟或詠拔犀象之牙角去黨無偏採翡翠之  
羽毛裁成而得二千首類聚而為二十卷若曰新古今和  
歌集矣時令公節物之篇屬四序而星羅象作雜錄  
之行並群品而雲布絲緝之妙蓋云備矣伏惟來自代  
郊而欲天子之位謝於漢宮而追紛陽之派今上陛下之  
敬親也雖無隙帝道之詔詢報約日域朝廷之本主也爭不賞



我國習俗方今奎寄華一合時祀夷詠仁風化之樂方云  
春日野之草悉靡月宴之物去千秋之津洲之塵堆  
靜我膺無為有截之時可願願深亮操履之志故撰  
斯一集永欲傳百王披上古之篇彙集者蓋是和歌  
之源也編次之起因准之儀星序惟靈燿樹財難披述軌  
有古今集四人言編命而成之天舊有後撰集五人奉  
綵言而成之其後有拾遺後拾遺令彙詞花千載亦  
集隨出於聖主勅代之勅殊恨為撰者一身之窮固茲  
訪延茲天曆二朝之遠再定法河步塵五輩之美豪  
排神仙之君屢刊修之席而已斯集之為抑也先

抽身彙集之中更拾七代集之外深索而微長之遺  
廣求而序善必舉但雖張網於山野微禽自逃難連  
筌於江湖小鱗偷漏誠當視聽之不逮定有篇章  
之於遠今只隨採得且所勒錄也抑於古今若不載  
為代之所製自後撰而初加其時之 文章各考一  
種不滿十篇而今所入之自詠已餘三十篇六義若相  
魚一兩雖可足侏古風骨之絕妙還有病詞之多加  
偏以軌道之思不顧多情之眼凡厥取捨若加尚之  
餘特運冲襟仗義我甚去皇法而四十餘年矣城自難  
觀唯造之書史李神氏用帝功而八十二代當朝

猶未聽叢策之撰集矣 宜知天下之都人女記詩  
斯道之遇逢矣 不獨記仙洞無何之鄉有嘲風  
弄月之真各亦欲呈皇家元久之歲有温故知  
新之心修撰之趣不在茲乎聖曆乙丑王春三月云尔













新古今和歌集卷第一

春寄上

春の山をかくる白雲のうらみ

攝政大臣

みづ野の山をかくる白雲のうらみ

太上天皇

かろくと春をえにしふきし

百首寄上

式子内親王

山ゆき春をえしぬ松はな

五十首寄上

文内

か来りぬ 杉のうらみ

入道前関白大臣

春よませゆけり

皇后宮大臣

春よませゆけり

後惠法師

春よませゆけり

西行法師

岩るさりし砂をけしむけとめて昔はとみなりをいけん

くみ人さる歌

風をせ小雲とちりてちりすし霞をまじりて雲とてちり

とれをまよきよなりぬしと君ちりて霞と山を霧にまじり

柳川院河之原百首うちてよけりありふ抄雲の

ことより久ゆかり 権中納言四信

おすり燈の下をちりてちりてちりてちりてちりてちりてちり

影をさる 山邊布人

あはれちりてちりてちりてちりてちりてちりてちりてちり

天曆四之原屏風乃奇

云生忠見

昔の影をさるふり小成よちりてちりてちりてちりてちり

崇徳院上百首うちてよけりありふ抄雲の奇

前奉儀教長

つらつと神とてちりてちりてちりてちりてちりてちりてちり

延和御時屏風乃奇

紀貫之

初てたぬ人を忘れしと昔の影をさるふりちりてちりてちり

述懐百首うちて久ゆかりふ抄雲

皇太后文より更俊成

清しけりし若菜ありて種とてつらね年とつじし種は實を  
日吉社より見てきくまつらひらみ日吉

河原や志賀の海松方ゆきりた世よいらるみ日吉らん  
百首ありききまつらひらみ

藤原家隆朝臣

昔河原よりいし浪を越えての鳥山より言はぬを  
わたりて実路道とよき

太上天皇

鳥のまけは毛をいづる者に松の葉をとりてあはれりや  
堀河後よ百首ありてまつらひらみ

藤原仲實朝臣

昔ははれもみりてかと思ふ松葉うと葉よはとる  
歌ありて 中納言家持

よ丸人ありて

今も小雲ゆきやもけりありあり春のしめり物  
九河内躬恒

いしきとむむはらむはれきりていしき来ぬ  
あはれ百首のうらよ餘家ありて

杉政大政大臣

元と物うすむ屋の風はそと君けよまの春は月  
和歌ありてまは月とよをとりあり

越前

山あり物いさむまは月定るる雪の如くは  
物いさむせてあふあせゆ水は春登とふ  
とては

大津門香通光

みこや物いさむまは月定るる雪の如くは

藤原秀徳

冬はくよまのりく雪難波の道れり春とこゆ白

まは月とよをとりあり

西村法師

浪

ゆりはくよまのりく雪難波の道れり春とこゆ白

源重之

梅はくよまのりく雪難波の道れり春とこゆ白

山色赤人

梅はくよまのりく雪難波の道れり春とこゆ白

いも人あつた

梅はくよまのりく雪難波の道れり春とこゆ白

百首あまのりく雪難波の道れり春とこゆ白

梅はくよまのりく雪難波の道れり春とこゆ白

志貴皇子

歌不効



手付

中務

あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと  
守覚は親王家五十首あよ

藤原家朝臣

大元と栲其白いよかすきんくそりしそめきんあひの月  
郎しん次

宇治前宮白土殿朝臣

ねんまうりくまおしり梅花けさろりよ若いあひ  
かきねの梅とよんゆき

藤原敦家朝臣

あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと  
あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと

梅花遠董といふりよあつたあかしのえきんあひくと

源俊頼朝臣

あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと  
百首あつたあかしのえきんあひくと

藤原定家朝臣

梅花あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと  
あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと

藤原家朝臣

あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと  
千五百番あつたあかしのえきんあひくと

右衛門督通具

あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと  
あつたあかしのえとあつたむもあかしのえきんあひくと





文集が後春夜詩不明不暗朧と月とつる事と

よか人ゆけり 人は千里

照を原くともとそぬまれよのたつ月暮きゆれ

祐子内親と若つた母ゆけりと女房と人あそび

来りけりゆきりて春枯るあられはしきうまじ

くとあそびゆきり人にくれば好まるとせを

秋しく秋り 菅原孝標女

涙をうたをひの母あつたは月の中あつる春りよれ月

百首あそびてまつらる

源具親

新故かたきぬ涙もかたきりうけりもくはあつる月よ

掃政大政大臣家北百首あそび

兼蓮法師

いほそきのおひろ碁も打とぬたつる月あつる月よ

刑部頼輔と命ゆけりふよそははかりきり

皇太后宮大夫俊成

きくを涙にわつたがゆきつる月あつる月よ

新とゆきり ちと人あそび

春小くつるあつる月と秋涼しく甲斐小まよふ家元きり

掃政大政大臣 海鴈と

むらさきよにらじの海とくつもみちの風秋の夕暮

百首をよみしつゝしるす

かゝる唐土はのむありぬる月と花は名をけり

守覚法親王廿十首をよみ

藤原定家の後

秋まよふ光ふとほりし唐土の月と花は名をけり

田中春雨の事と 大僧正の事

しづくときれあつちりしきいふあつちりしき

寛平河内守の事と 寛平河内守の事

伊勢

水乃かきふあやとりそらるき魚山乃をりてあてしん

百首をよみしつゝ 杉政大政大臣

とれは好山乃忘物よむと昔乃をあぬそりふき毎に

清浦の後の事と 雨後苗代とてはよりの

藤原法親

雨と建いとも田乃と流るたの海ありて苗代ありて

幾時時屏風よ 凡河内躬恒

きるれ方のせりしつゝと昔柳の葉はなつちる色海よりけり

題ありし 冬寧大貳の事

打ちいしきまはきよなるき柳のふけしきよなるの

補仁親王

みくし柳のたけ川のまゝ柳のふきをねまふれよりの  
百首の中よ 宗徳院御事

風さきく柳のふきけりけりまのけまをてそふ

建仁元年三月の合よ霞隔遠樹の事な

持中納言云云

にを守むに此の柳のふきをねまふれよりの

百首の中よ人のけりけりまのけまをてそふ

殿直門院太極

ま風が吹くまの柳のふきをねまふれよりの

五五百毒の春前

藤原雅純

まの雲のまの柳のふきをねまふれよりの

藤原有家御后

青柳のふきをねまふれよりの

文内卿

うすまの柳のふきをねまふれよりの

曾祢奴忠

あまの柳のふきをねまふれよりの

玄生忠貞

ついでとあひそみんかきり花はたきけふもせしむ

西行法師

り野山標の枝よ霜らりて花をそけけり年やもさる

白河院を相おたりゆしそりたれんく山家小夜

とまひといふるをさうもゆけり

藤原隆時の後

標むつらゆりみしとさふじ白守りあがりまの山家

亭子院を合寄 紀貫之

こりあまれ山家ふあくる道そちろく一日とさるまの山

標政を政大臣敵百首の合小野遊るの山

藤原家隆朝臣

なまらのせとこもさし流りまぬ花の宿をせせりあらし

百首を寄し時 式子内親王

油標を流ぬみそりうとりのまにりしとあつせれき

歌あつ流 後人不知

うそむいなきかうしりま毎よ花の下ひもいふとらん

中納言家持

抱む人受人あの人言霧さつてり山家とりゆり花

花のうそを後ゆり 西行法師

若野山を流れとより道うてまはぬとれ花とさる

和方取也 方はくもつり 春の芳とよあり

年道は柳

葛城やいづれ梅さればゆきり 勢田のむくゆふはくもつり

歌不効

候人あつ次

いづれより方は柳とよきとよ 昔か所へ花さ来りふり

源忠朝臣

春小の一年は初めむあつと 田をふとくも花とみふく

魚内くもつりて 人志はくけい 物きれ

道余は柳

ちくをれきりくもつり 柳さ道とむく けいさつりきん

百首をきりて

藤原定家朝臣

白雲のまはつとてきりて 山とく 花さしむるあつ

歌一十

存金家衡朝臣

くは山花あつり 白くは 花さしむるあつ

和歌取方合よ 蜀猿花とよきと

藤原雅徑

いづれより方は柳とよきと 花さしむるあつ

半首をきりて

初まて花あつと 花さしむるあつ

古歌といつるを

前久信正慈園

らう地源へまきつねぬたつり病けさ花よ春風をそく  
千五百番多合よ 右末の猪通具

石と方ねのつりて種へそく春の守りぬるそくありん  
正三位季結

花をみ方道のとくそくそくそくそくそくそくそくそく  
藤原有家の物伝

あさ日影をうつ山ありそくそくそくそくそくそくそく  
そくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

そくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく  
そくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

新古今和歌集巻第二

春歌下

釋阿和方前也九十賀一竹一竹一竹一竹一竹一竹一  
ゆくりそくそくそくそくそくそくそくそくそく

太上天皇

梅さくそくそくそくそくそくそくそくそくそく  
千五百番多合下 春の歌

皇太后文天皇後成

くそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく  
百首より 式子内親王

くはくそふあがひとくそふ建つてはよむはなりふきりくふ  
内大臣小納言のりては山花とてふそはけふの事

京極前関白太政大臣

とく雲はふあひく山の屋を構ふる其代にゆきはけり

後子内親王家少くく<sup>花</sup>とてふとてゆけり

権大細言長家

花の色ふあひとてふ新立御にいえふとてふとてふ

新不為 赤人

とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ

在原業平納言

花よありぬ款をのりてせうとてふとてふとてふとてふ

凡河内躬恒

いよとてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ

伊賀

山探らりてふの来にいよとてふとてふとてふとてふ

貫之

我屋とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ

寛平河内守

よとてふとてふ

新とてふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ



新しす

若人

春の風をよみて花の香をよみて人の心をよみて

貫之

花の香をよみて人の心をよみて春の風をよみて

五百番の巻

皇太后宮女

風をよみて花の香をよみて人の心をよみて

守貞法師

藤原隆経

花の香をよみて人の心をよみて春の風をよみて

杉政大臣

皇太后宮女

花の香をよみて人の心をよみて春の風をよみて

後部成仲

花の香をよみて人の心をよみて春の風をよみて

山内

能因法師

花の香をよみて人の心をよみて春の風をよみて

新しす

惠慶法師

花の香をよみて人の心をよみて春の風をよみて

花の香をよみて人の心をよみて春の風をよみて



かこむとむあをいづく孤舟暮らつる別とくあふりきれ

題前

山嵐は危るるおのよりもれ花らるぬやと金毛をえと  
早首方そそよつり中ふ湖と花と

文内也

花西ききりし山嵐吹よるりされゆく舟の徳ふあり  
閑遊花と

おぼやまずえり花を吹くりに嵐をうとむ天れ杖と  
百首奇とそまつり言ふ

二条院續成

山はと嶺の嵐よらるむの月おぼとまらぬとありと

百首奇と一いつたれ春奇

宗徳院所寄

やうきうとと梅の梅らるる花のあふりよる春のつる花  
春日社方合とそとく奇よるも竹さうりよ

形神に頼補

ちりゆふ花のやあふりし山嵐めさうとさきしつる  
寂勝曰天王院の侍子よ若野山とさうり前

太上天皇

みしれに秋の梅らるふり嵐をさうとさきしつる

千五百番の命よ 藤原定家朝臣

桜色の衣を著せ給ひしころ我人の君とすむ

下をまつて大内が親父おゆりてゆりしに危ふ

らりてゆりむとよるはさしにまはせ給ひ

つゆりゆり 太上天皇

空ふたも危しとゆりおろし給ひし時と云ふ

ゆり 杉政冬政大臣

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

家よりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆり 式子田親王

屋より朝の桜あつた風をさし給ひし人

ゆり 堆心親王

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり 藤原家隆朝臣

桜もあつたゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり 皇太后宮女

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

後徳大寺大臣

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

入道おまの政大臣



かろふ事毎をうへて所をて留まらそつせとれうせよ  
紀貫之曲よりあしむる方付月入花灘暗とよ  
こもゆよとゆるり 故と是則

花のいとせとそつる来又月をたてあつらふとよ  
雲袖院のほらうたよゆりけりあはれらうて  
ふがとれよのりゆをれ

良羅法師

あつらむとつあもたうて後の春ともえりそ  
みよ番手合よ 宋蓮法師  
なひらうなはる棠もにのしんきさめつ花のたけ

らるふらり所と積うたの程わむのたふ喜れし風

権中絶言云

春ゆくそつ神はほとれあふあつら雲をそれは

百首うらりし時 杉政公政大臣

とを山うらりむよ春くれてゆひとれあふの

藤原家隆朝臣

昔花月きしれ咲きたよそり花の栞しらうそめん

皇太后文と更俊成

弱ちて弱あかむしにさつら花の露そふみ手れ玉河

坂川院以時百首うらりし時



修めし御書より春のたれよと云

久保正純尊

あまもはかたふらふ御書よと云しはれは終りまひん

卒首より一冊 宋蓮法師

着てゆきまふはなと御書よたはけりらぬ果

山家三月末と云くは約り

藤原伊総

あまもはかたふらふ御書よと云しはれは終りまひん

歌一冊

皇太后の御書

あまもはかたふらふ御書よと云しはれは終りまひん 春のたれよと云

寛平御書よと云しはれは終りまひん

あまもはかたふらふ御書

あまもはかたふらふ御書よと云しはれは終りまひん

あまもはかたふらふ御書

あまもはかたふらふ御書

あまもはかたふらふ御書よと云しはれは終りまひん

あまもはかたふらふ御書

あまもはかたふらふ御書

あまもはかたふらふ御書よと云しはれは終りまひん

あまもはかたふらふ御書



新古今和歌集卷第三

夏哥

新古今和歌集

持統天皇御歌

春をくまにさしけり白妙乃花御歌

善性法師

行かばとて海の波もあはれとてよきとて夏衣の

更衣とて好まら

前大僧正慈舟

ちりそ花のけしきあのをよにそひてとて夏衣の

春衣とて好まらとて好まら

源道深

夏衣をいづくのぬれぬ人の、行くもいさよらう  
なうと、火のあともいふ人の

皇太后太后太后

けしきもいさよらうの、いさよらうの  
卯花如月といふやうなよませはひさう

白河院巧女

うたはれもいさよらうの、いさよらうの  
卯花如月といふやうなよませはひさう

卯花如月といふやうなよませはひさう  
卯花如月といふやうなよませはひさう

式子内親王

長きあひのよませはひさう  
養をいさう

いさよらうの、いさよらうの  
寂勝院天王院の、いさよらうの

藤原雅持御后

卯花如月といふやうなよませはひさう  
紫波院の、いさよらうの

侍賢門院安藏

卯花如月といふやうなよませはひさう  
卯花如月といふやうなよませはひさう

形不効

曾祢奴忠

新くく彦の本式もあつたし何とて月の新掃め  
かりおとさうみ人のきふいと第集にいつくあつた

藤原元真

夏草のあつたふりあつたはたの人もいふふ

延喜抄

交草のあつたふりあつたはたの人もいふふ

柿本人丸

なく新もといふといふのいふおむのいふおむ

か美初よゆうてゆげつふ人のいふおむ

ゆげつふ人のいふおむ

世式部

時をいふのいふはたの思の森に

か美初よゆうてゆげつふ人のいふおむ

年乳母

都をいふのいふはたの思の森に

新もといふ

續人

と月をいふのいふはたの思の森に

中絶家持

中納言 一發の紙にのり紙は伊予の人の紙やとて

大中臣 結宣の紙

時鳥の紙つゝはつちの紙をたててしるゝ一紙の紙に

大納言 經信

二發の紙つゝはつちの紙をたててしるゝ一紙の紙に

侍 客員部云といふるを紙

白河院 以房

三發の紙つゝはつちの紙をたててしるゝ一紙の紙に

紙をたててしるゝ一紙の紙に 花園 九大臣

あつちの紙をたててしるゝ一紙の紙に

紙をたててしるゝ一紙の紙に 前中納言 匡房

前中納言 匡房

紙をたててしるゝ一紙の紙に

入道 前園 白右大臣 約書の紙百首云々

約書の紙 皇太后 宸筆 大更 俊成

約書の紙 皇太后 宸筆 大更 俊成

約書の紙 皇太后 宸筆 大更 俊成

題 一 相摸

約書の紙 皇太后 宸筆 大更 俊成

徳成

たつ里もさしあかすに付るありけり約そつらひ  
寛治八年前太政大臣高陽院行合小付為と

因防内付

新設の事務よりこの部云雲のれをにトコと云  
海を時鳥といふ海をいふと約する

按察使云通

二發とさう決まいて部云いく書ありありとあり  
百首のそをさうつりては夜尋乃中ふ

氏子の範光

部云が所一と行ひてさうさうのそり新設のそ

時鳥とよあり 八条院高念

一發の行ひてある部云と源子とそり新設の雲其よ  
子と番高念よ 按察太政大臣

ある部云と行ひてさう月と山とさう新設の  
後述大寺太大臣およ十首のそと約けふありてつ

皇太后文太史俊成

りてさうあり  
部云と行ひてさう月と山とさう新設の  
部云と行ひてさう月と山とさう新設の

顯照は

りてさうあり



百首身人しくゆきせゆりきりては夏前にて  
くえのきり  
捕政を政大臣

打さりゆりたる時をかくやと月つ雨の中を  
迷懐よせて百首身よりゆきりて

白皇太后宮人女俊成

空ふ文あやみ神ふけりてそよほしは神の白玉  
丹月みづくとき海山つりてゆきり人母

大納言経信

お船くいらりあは花のあはれゆりあきりたは  
はりのあはれすれゆりけりり丹月首を

ゆふあはあはしてゆきふあはれ神とゆき  
はあはふはくうり

上東門院小女お

おゆきあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
山崎早苗といふあはれあはれ

大納言経信

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
おゆき九十賀をききしゆりては屏風より丹月

橘政大臣

と山田よひくき縄のうらとてくらやあん月御共

新古今

伊勢太物

侍りくうりたこのすれを世あつてん家まゝをぬり

大納言

かよひのりえれゆもる運はともとまてかろ

お中納言

ゆもるゆほのほみあつて世こまへ月共新古今

雨申本様

玉のくとあがりあつてあつてゆもるゆほのほみあつて

百首あよませゆけり

入道前田白大臣

か月の行方ゆあつてこもあつてあつてあつてあつて

か月のあつて

お中納言

むりこれたけりあつてあつてあつてあつてあつて

意木田氏長

とてゆもるゆほのほみあつてあつてあつてあつて

百首あつて

前大納言

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

六十首あつて





その如き人々を好む者ありては、  
かゝる世に生れし人々を好む者ありては、

皇太后文宣後成女

橋の白雲をよみしは、

藤原家海船臣

さうらを花とよみしは、

おとせは秋とよみしは、

藤原定家朝臣

夕雲はる雲の雲は、

橋の都をよみしは、

都をよみしは、

坂の院の院は、

さうらを花とよみしは、

権中納言酒信

時をよみしは、

白河院の院は、

庭をよみしは、

惠慶法師

つらねをよみしは、

松政大臣の家百首をよみしは、

前大僧正慈因

物心毎あはれをえみりまはく母の感えり河乃夕を此  
寐蓮は神

うし母をせりしは親の思ひむとわすれり大の親

千五百番を各よ 皇太后宮女夏後成

茶河から河の中物心毎いく瀬よ夏秋とあふは

藤原定家御長

久々の中なる川乃物心毎いふ契て 雲深くん

百首をさす時 杉政大政大臣

はり大のじり此ひらあみとて暮るる里にさるる

式子内親王

空らう青竹乃葉すまじ風乃暮にさるる此を祥志

鳥羽よ竹風夜啼といふるを人をつらふ山

かゝる

春之文指筆云継

忘れうさし竹風之け秋をたらくな秋の夜

千首をさす時

お久僧正慈因

じよまに影をさすゆへ山乃あそも月夜を母に

取勝回天皇後乃清あよ清久実うまにさるる

持久細言通光

清久の月乃影をたすあそももさるる浪の上か

家百首方合よ 抄政大臣大臣

かき得て毛涼しむる夏むうと記にけしふやう月歌  
抄政大臣大臣家よく待言とあふせけり水色  
冷自秋といふこととく人き歌

五歌新伝

涼しき娘やうりてとせはあつ川のふき抄のしと風

歌不知 西郊は柳

道はの清あやうり柳けあふとてとれきさうりて  
よく得たう得るせり常れけりひて涼をさうりて  
茶徳院よ百首歌をそよとけりきりて

藤原清輔朝臣

よびつゝ涼しく毛涼りう夏む日は夕に連なるあうりふ  
五首毒身合よ 抄中細言云抄

病さうりて乃玉降るりあいにしむとけりあふり此雲  
雲隔遠望といふ事うりあふとよと約きり

源俊朝朝臣

十市少夕立とより久きこのあふれく山雲う連中く  
夜月とより 頃三位頼政

庭の首まてかとうぬよ夕立れをさうりあふり月る  
百首方乃中よ 式子回歌王

夕立乃さらもこまぬなるはのさあしく山母は下れ  
五番番ふ合よ お大御言忠良

中流のさしやうれ果の戸よさひくえあつひの  
百首言事あり付 杉政左政大臣 夢

秋らうれ言しこれ枯よりく蝶の涙の露や下葉をひん  
二条院讃岐

たぐ蝶乃移え涼しき夕れぬ秋とけう森れく露  
雲のこいれあつをたてよとゆる久秋

近らうらふは雲はうらふめさあぬ葉乃まらに  
玄生忠見

卒首言事あり付 杉政左政大臣

常々好涼ふおけりや此秋のよあぐさにかよふ秋風  
形やの秋物ふ合しゆるる日納涼とよ免る

後惠法師  
秋はうらふ山けしあはひつて吹雪る物と秋忠と何れを

瞿麦露ほしと事と  
高余院浄奇

白露乃玉をそゆつるませはうりふ文た人そるよとていむ  
夕立よとく免る 前左政大臣

あゝ露のたまひをさつらうとあつめくまゝとていむ

百首言類約を中ふ 或子内親王

平夜ふれあねれ病よこもせれいふ小てぬ秋に下に出ぬ

延喜式を後約をり 前大僧正慈園

雲留ふ夕を秋よあけり風をりよてぬ秋う包うる

太神文よそそまつりいふ言中ふ

太とてり皇

山雲れら秋のあけり雲らに接して夕すくくさ接れりて病

文治六年女御入内屏風よ

入道前実白太政大臣

若舟ふひあそりれと葉むきそそりいひてふ秋の夕病

の言番三言よ 文四句

かそ枝ゆとわのうらうらと病よきりも形すも風を力わ

百首類を中ふ お大僧正慈園

夏夜うと涼くぬぬたりよや文ねん中条あいのえ

延喜式時月次屏風よ

云生忠岑

夏よのち扇と秋のちと病とてさすまついさすむとすん

貫之

みそれを海のりせりさすか夜日をも夕を道に浪たさる

新古今和歌集卷第四

秋歌上

歌三十一

中納言家持

秋あしのみしらぬ山あり首うらうらと喚ぶは秋さよふの

百首ありに秋の歌を

崇徳院行方

いづこも秋の葉しきのかぐらふをよせや秋を風を愛

藤原季通行方

こみ秋の葉に秋さよふをよせや秋を風を愛

文治六年女内侍屏風よ

後述大寺左大臣

いほまきくぬらした里とむらも暇ふかたはあつた  
百首う積約きつの中ふ

藤原家隆朝臣

きよふふとこびとさひけの因の生田の松よ枯い藤  
寂暎回天王院の障子よふ砂りきつる前

友原秀房

吹風のをとれそを録そふ砂の尾とれ松よ枯いきよふ  
百首う積約きつの中ふ

皇太后文太史俊成

ちり山松のふらみとせあつる田ふ小畑をそとく  
守貞法親王五十首う積約きつの中ふ

藤原家隆朝臣

あつたをそとれそを録そふ砂の尾とれ松よ枯いきよふ  
百首う積約きつの中ふ

右近大政大臣

源兼光のふらみとせあつる田ふ小畑をそとく  
右近大政大臣

右近大政大臣

あつたをそとれそを録そふ砂の尾とれ松よ枯いきよふ  
百首う積約きつの中ふ

源具親

ととそとの松のふらみとせあつる田ふ小畑をそとく  
百首う積約きつの中ふ

顯眼法師

水とそとの松のふらみとせあつる田ふ小畑をそとく  
百首う積約きつの中ふ



題前

秋の心よりとく夕霧を神の心とていさるれ  
早首身よりとくつらし時秋の奇

藤原雅經

三秋のまよふに悲し下萩の葉染れ霧は秋風を吹

大祥まよふとつらし秋意うち中に

太上天皇

あさ霧の思ひあはれ山嵐よそはれ物に秋をうけと

影さつは

西行法師

なごもて物よふとぬ人ぬふとるをさけらるる秋のふ風

あさ霧のふ葉染れ霧は海より秋風をぬまぬ秋の

崇徳院の百首よりとくつらし秋

皇太后后まよふ秋

かあつらとく山田のひとて又秋ぬとく秋のふ風

中納言中納言のふ時家よ山家早秋といふ

法性寺入道前田白鳥

あさ霧もよ田代山の里より秋をふらりと秋のふ風

秋不知

中務卿具平親王

夕霧の秋のふ風の表海よりとく秋のふ風

後述するた

夕雨連は萩乃葉ひき吹風よと我も如く海にのり  
茶屋院よ百首うたをまうらう時

皇太后宮大夫俊成

萩乃葉を葉ありて吹風よと我も如く海にのり

影しらす

七条院権大夫

萩乃葉を葉ありて吹風よと我も如く海にのり

類とらりてこまうれあふけりふたの松

秋風をくさる

藤原純衡

日影つる若くは海に連つて信をの松

百首うた

式子内親王

うた萩の萩けの袖よかろ也かすめは萩のうた

影しらす

お模

てまにゆくは吹風のよは萩のうた

大貳三位

おき風吹じよと白霧のよは萩のうた

曾孫ぬ忠

萩のけ萩のうた葉は萩のうた

小野小町

吹じよ風吹じよ此萩のうた

延喜式時月次屏風

紀貫之

わがまをよれをなすてひとけし書しつねをひらけ  
新あき野 赤人

ころたつらほりぬいし星乃こけり舟かいらふはく  
宇治宮白太政大臣家よきまのつとよとゆきふ

指大納言長家

養てとしこ宿の池あり星あいのひをばいれや  
礼山院河内守七ツ三三はくもつらつ時

藤原長法

袖ひらてつて母じきまはるよつら星はしのえと  
小

七月七日七夕まつりすのころあしふかき

急主輔親

雲るしと星あいのえとまじり公あてしはれ  
七夕まつり後ゆき 大宰大臣高遠

七夕のあしはる衣うらかきあつれと梅風そく  
小舟

たかきしは衣のほろいしと吹さう舟しはれつ風  
皇太后宮大史俊成

七夕のこけり舟のあらぬふく結さし露乃玉は  
百首交中よ 式子内親王



持僧正永銀

秋と秋と行そとと行月兼秋ととと露よゆも  
守實は秋五十首よよませゆるるに

形眼法師

秋のちま袖よけくさ回のは秋のまよひまよふも

影さく次

祐子田親王家紀伊

とく露もさのひさく秋をよよませとさひつと秋露

人磨

あま露れ露りの秋の夕露よゆまよふとさよふ海は

中納言家持

秋のちま袖よけくさ回のは秋のまよひまよふも

九河由新恒

秋の野とふゆく露よゆまよふとさよふ海は

小野小町

秋のちま袖よけくさ回のは秋のまよひまよふも

藤原元真

秋のちま袖よけくさ回のは秋のまよひまよふも

千五白番多合小

左近中右良平

秋のちま袖よけくさ回のは秋のまよひまよふも

南とよ秋

云歌法師

秋のちま袖よけくさ回のは秋のまよひまよふも

あはれは海女一様も白鳥ありてなほそよの野の積風  
景徳院より首首をそそきつりけり云

清輔朝臣

うと霧れまうれりむれ物とより枯文とそわつてん  
入道実白右大臣より言ふ時首首をまかせ給ふ

白鳥右大臣俊成

いとかや神の言ふまじりてまじりて言ふも枯の秋の  
筑紫よの言ふまじりて秋野とまじりて言ふ

大納言経信

花のあはれ人有りあはれ物よまじりて言ふまじりて言ふ

曾祿奴忠

とてて月とまじりて言ふまじりて言ふ

貫久之

山のあはれ物とまじりて言ふまじりて言ふ

坂上是則

うか海濱着り来りかき言ふまじりて言ふ

人麿

まじりて言ふまじりて言ふ

よかん人志

まじりて言ふまじりて言ふ

女御徽子女王

みちも風ふさむ花すれはじとほりまつる病よけ  
百首歌下

式子内親王

花落又病よけふそはあうりこほふ秋意あうり  
右大臣左大臣百首歌よませゆけり小

八条院六条

那言とこも道やう秋風とあこほあひくも病よ  
和方那言合よ朔草花とゆへ

左侍門侍通光

宿とそ病よけ山の中庭に秋のさきとそ秋の下風

歌うす 前入信正慈園

身にいさふさいと病ありうと薬よそとあひあうと  
崇徳院行時百首歌うけり小秋と

大藏卿新宗

身れれ秋さいつと病よけの秋ありうと薬中風わら也  
秋より久ゆり方に 源重之女

秋とそ物をとれ病よけの秋のさきと風中つて  
坂河院よ百首歌うすてまうり小秋と

藤原基俊

秋風乃やけいさひ吹ふ中秋ありうと病よけ





不り事ありてなまじき心は物と秋の夕をふかきぬ

鴨長明

秋風のふるを伴ふる神ありて我々の秋の夕

西行法師

おほらるる秋の夕のあまの夕のあまの夕

式子内親王

そ秋の夕のあまの夕のあまの夕

路不智

藤原長法

日くはあつたふれらうかりきうははもつとあまの夕

和泉式部

秋の夕はあつたふれらうかりきうははもつとあまの夕

宮祢好忠

秋風の夕のあまの夕のあまの夕

相模

あつたふれらうかりきうははもつとあまの夕

は佳入道前園白之政大臣家共舞合よ野風と

藤原基俊

そ秋の夕のあまの夕のあまの夕

よま田原多合よ 右忠の持通具

源宗光里の月影さけりしをてあまの夕のあまの夕

早首方々をうらうらに枯月とて

皇太后宮女

あけつらに秋の木ありとてうらうらに秋の月ありとて  
守覚は親王五十首よき世のうらうら

藤原家隆朝臣

あけつらに月ありとてうらうらに秋の月ありとて  
拾遺は親王五十首よき世のうらうら

藤原家隆朝臣

あけつらに月ありとてうらうらに秋の月ありとて  
水鏡は親王五十首よき世のうらうら

左衛門督通光

あけつらに月ありとてうらうらに秋の月ありとて  
百首よき世のうらうら

前大僧正慈園

あけつらに月ありとてうらうらに秋の月ありとて  
或子内親王

皇太后宮女

あけつらに月ありとてうらうらに秋の月ありとて  
三条院朝臣

是月乃山花のいよひにさしきくや花の月とて  
雲間渡月といふとて

坂河院行房

あけもやばらさしきくや花の月とて

新石知 堀川右大臣

ふりもやばらさしきくや花の月とて

橋本仲朝臣

あやもやばらさしきくや花の月とて

法性寺入道前白土後大臣

風吹もやばらさしきくや花の月とて

後三位頼政

まよもやばらさしきくや花の月とて

法性寺入道前白土後大臣

冬宰大臣重家

月夜もやばらさしきくや花の月とて

初言取言合小湖を月といふとて

藤原家隆右大臣

あけもやばらさしきくや花の月とて

百首詠あり付 お大信正慈高

あけもやばらさしきくや花の月とて

新しす

皇太后言々使成女

おとろふ秋のあけぬきと月ころもかろひらふ

家隆の信

あつたけなをとりひくは月のかきぬきとあつた

卒首言をさうくくは月前草花

杉政の政大臣

あつたけなをとりひくは月のかきぬきとあつた

建仁元年三月三合小山家秋月といふは

約し

とけもあつたけなをとりひくは月のかきぬきとあつた

八月廿二日秋のあけぬきと月ころもかろひらふ

あつたけなをとりひくは月のかきぬきとあつた

月前風

兼蓮法師

あつたけなをとりひくは月のかきぬきとあつた

鴨長明

あつたけなをとりひくは月のかきぬきとあつた

八月廿二日秋のあけぬきと月ころもかろひらふ

藤原秀行

あつたけなをとりひくは月のかきぬきとあつた

八月廿二日秋のあけぬきと月ころもかろひらふ

文内云

此の月を以て月宮と云ふは

直秋門院丹後

皇女御成すは月宮と云ふ

鴨長明

此の月宮と云ふは此の月宮の物なり

跡す

七条院大納言

此の月宮と云ふは此の月宮の物なり

此の月宮と云ふは

藤原家隆の臣

此の月宮と云ふは此の月宮の物なり

跡す

大僧正慈覚

此の月宮と云ふは此の月宮の物なり

大納言

此の月宮と云ふは此の月宮の物なり

源道深

此の月宮と云ふは此の月宮の物なり

東門院小女

此の月宮と云ふは此の月宮の物なり

和泉式部

たあぢいふかきついでに  
月と見るとはうらうらと  
月と見るとはうらうらと

藤原純永の長

夕方の神とそらりつねの  
月と見るとはうらうらと

かき  
お模

身ふれぬる影とそらりつね  
の月と見るとはうらうらと

永兼四子内裏号合り

大納言經信

月影のこぼるるそらりつね  
の月と見るとはうらうらと

かき  
左衛門督通文

立田山よそに風が松をけり  
と見るとはうらうらと

宗徳院よ百首をそらりつね  
の月と見るとはうらうらと

左京大夫顯輔

秋風よこぼるる雲をけり  
と見るとはうらうらと

かき  
道因は師

山あふ雲をけりと見るとは  
うらうらと

殷富門院大輔

秋の神よこぼるる雲をけり  
と見るとはうらうらと

式子内親王

音たにそとを神の来月の  
と見るとはうらうらと

くもさうくあじはれぬきれいもまの秋風

廿一首寄中尉 杉政左政大臣

雲はさうくいそさう秋風と松よ抄て月とみか

家よ中首寄よませゆさうと来

月そあもなくゆらては秋の雲の空とぬ秋の風を

定家右大臣

さひらやまの秋風涼く月とけうくくら秋橋

歌一十次 太夫右忠次

秋乃輕れあはれいそさうをきれ約よ文あつる月

廿十首款之そまうく一兼野往月

杉政左政大臣

ゆきあえもいさう乃武野野小弟此系くさう月親

雨後月 宮内卿

月を指さるんゆらじぬれ秋ゆ雲のさうの墨人

歌一十次 右衛門督通具

秋の葉の霜の月を露あつる袖よ吹さす秋乃と風

源家長

秋の葉の霜の月を露あつる袖よ吹さす秋乃と風

元久元年八月十八日秋の葉の霜の月を露あつる袖よ吹さす秋乃と風

前右政大臣

風はうら田は庭はさる月やあふふじとふゆの  
和方市子合り田家月を

お大信正慈園

鷹のうら市子合り田家月を

皇太后文太史俊成女

いかに吹風よまらせてまじ庭月をゆきにまらあけけり

題はうら次

あかきて孫ぬねあらしうらほはりまて月まらほはぬ本は遠

大中臣定雅

秋の田はまら孫の床りまじり月をれをまじり露か

系徳院に時百首あうりうらふ

九条大史顯輔

秋の田はまら孫の床りまじり月をれをまじり露か

百首あうりうらふ

式子内親王

秋の多の孫ようう成ゆきまじり花片うら孫は月を

題は中に

秋の多の孫ようう成ゆきまじり花片うら孫は月を

千五百番うら合り

いかに吹風よまらせてまじ庭月をゆきにまらあけけり



維房の家を合よ晴月乃をよまら

二條院讃歌

ふかしの秋の静とあつ露は久は又そつ神よけの月  
卒首秋をそつつりしは

藤原雅經

そつひの口とよは露乃とけつあををけり月乃神のせえ  
藤原雅經

新古今和歌集卷第五

秋寄下

和方和也とつこも号よとけつよ夕廣とつとと  
藤原家澄朝臣

とつ紅葉つらつ山乃夕時あつそやひつり廣乃つらん  
百首乃つとつ入道丸大臣

あつらつよ夜の口はつ米こ也尾よの月よき朝乃海乃  
宋蓮法師

あつふせつとつあつ第柳意とつつ山よあつとつ柳乃秋乃  
後惠法師



三山人の徳の多に 中宮大夫御忠

山里のいさよれ風よ静とありて秋ゆく鹿の鈴を聞る  
郁芳門院乃前裁合よよとゆるり

藤原顕繼朝臣

桂腹のいさよれと柳麩乃あさよとよと秋高れ風  
秋高れ風

後直は師

新田山こすよ海とよふちりきにいよくも鹿乃れよとあり  
秋子因親王御号合れり鹿乃あさよとゆるり

中宮細言長家

是の秋乃あさよと柳のつとれよと秋の毛並くやあり

攝政大臣家乃百首歌合よ

前大臣正益園

わきかきつがよと柳乃あさよとよと柳葉よと秋の風

秋高れ風

山田のあさよと柳のつとれよと秋の毛並くやあり

前中納言匡房

秋高れ風乃あさよと柳のつとれよと秋の毛並くやあり

善滋為政朝臣

かきつがよと柳のつとれよと秋の毛並くやあり

中納言家持

海風の吹くはなれぬとてそらひらけりて  
人麿

好道は鷹の風よおとすまよあつ時  
先代養のほよふらふとかなりわらぬはし

貫之

かりて海と田の神神しらてうやうや  
菅贈太政大臣

管染由玉とやほわいの神の波を好むら  
中納言家持

中納言家持

我宿のたれは未とる露のとけりて  
吹

惠孝は師

秋とて葉と花をよびとらん海舟の末にけり  
人丸

好道はとくとも露よりのあつらうと  
了晋河守

にありの野をもしも白露はあふと  
海冷泉院みころまをりし時

坂河右大臣

病はけし好むとあつかり衣を  
閑庭露流しし事な

基後

庭の向よさげり蓬よさくもせしるもきいさげり露なる  
白河院ゆく野草露盤とらるるをさるるこ  
とをつらうらふよ 贈丸大臣 長實

秋の野を第葉とてあそぶ露よ替えてやの露ゆらん  
百首言中 時 寐蓮はゆ

物言神を露やあつてせん秋風あつてぬもあつた  
秋言中 小 大上とて皇

露の神よ物にさすははれとくあつた秋のあつた  
野原の露乃ゆると露をさつたあつた秋風を

題不知 西約はゆ

養老さしは秋のあつたゆふもあつた秋のあつた  
守賞は秋を早首言中 小

家隆の臣

虫のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
百首言中 小 式子内親王

秋のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
藤原輔尹の臣

秋風あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
前大僧正慈海

衣ういよほ花よすうらやうかた多きく物さうい

千五百番言合よ持身 持中納言云也

むうつや海ついのりのおしくもさぬるらよじよま花

和歌取言合よ月下持衣といよと云

持政大臣大臣

里八意て月やあぬ恨てもされあさうよ中衣うつん

文内也

ゆらゆらあめよそあすいあさしあ月よるの夢

千五百番言合よ 定家朝臣

秋たはあすい人とあり月影とほもあやあにうつ衣か

持衣よりのゆけり 大納言信

古ふむうのゆかりや梅の兒も啼くはく初ん

中納言急備家屏風

貫之

唇あえく風さむか衣あまらそよさぬうたあは

持衣のゆと 藤原雅經

みうぬら山は杖をさ新海くさうさむく衣あま

式子内親王

さしうらあめあはさしに着えて物さ神の露たそが

百首言合よあゆりうら

源よきりしつらるる月内にて十市里よ衣うの志

九月十三日月内あり約するともあつてよる

きふ

道信朝臣

秋のうらと秋のけとる月内は神ものう次露とて秋

百首言まひ時

藤原定家朝臣

むらあつ山を此あつとるは霜とて海より来月内

秋政大臣大將よるきりる月内五十首よませ約

きりい

寐蓮法師

むらあつ山を此あつとるは霜とて海より来月内

月内言まひ候約あり

大細言朝臣

秋の朝衣とひいあかき秋をも月内支母とく物えり

九月のほいこをりあいに

花山院法師

朝のよとやあつ月内成ふきりあつとるもや秋支母とく

中首言まひ時

寐蓮法師

ひいあつ山を此あつとるは霜とて海より来月内

秋の言まひ

冬上天皇

ひいあつ山を此あつとるは霜とて海より来月内

河霧とて事と

左衛門督通光

ひいあつ山を此あつとるは霜とて海より来月内

坂河院百首より

拾人納言公實

棟とは京洛の川きりならんよて雲井ふみゆのめと日宗

形不知

曾祢奴忠

山里に霧れまゝの命をすまゝとらゝく人の神をみじ

浅原深養文

なぐ鷹の羽状のこ葉をくまゝとらゝく山霧をくまゝとらゝく

人丸

かきやかり萩の葉をくまゝとらゝく秋風の吹かろふよかりたつた

秋風よとらゝくしゆり屋をくまゝとらゝく雲をくまゝとらゝく

凡河内躬恒

初鷹のこ風をくまゝとらゝく成るゆきまゝとらゝく後神の衣をくまゝとらゝく

後人しゆ次

うらゝく風よとらゝくしゆり屋をくまゝとらゝく雲をくまゝとらゝく

西行法師

よこ雲の風よとらゝくしゆり屋をくまゝとらゝく雲をくまゝとらゝく

とらゝく雲をくまゝとらゝくしゆり屋をくまゝとらゝく雲をくまゝとらゝく

か十首より

前大僧正慈圓

大僧正の如く月乃萩の葉をくまゝとらゝく雲をくまゝとらゝく



影をうけ

後進は所

ひも雲も鷹も風も晴れん  
後進は所  
皇太后宮太后更後成女

吹由ふそふとわろ物宿る  
詩中合一言中小山路秋行といふ  
皇太后宮太后更後成女

家隆朝臣

秋風乃神小吹き  
みす首言ふそふとわろ  
皇太后宮太后更後成女

宮田卿

霜とまらゆれ乃葉れ  
皇太后宮太后更後成女

鳥羽院河内裏  
てじといつけゆ  
花園九大臣宅

九重いづつゆひぬも  
影をうけ  
権中納言定頼

海より文の  
かまの野の巻と  
中務卿具平親王

海風よ志の  
影不知  
大江朝臣

祢豆すの神  
みま白藪奇合  
お大備正慈翁

好ましく家も露も母の夢に里もふそのの福なりきり

左忠の孫百通文

けり日平ぬりしおをむらあいにたか秋風ふうはしり

野志の次

皇太后文と更俊成女

あまにらる露も抱りしうまひてうら時あり家山を

千五百番う合よ

あまも風吹りふ旅いきく木もふうらむ宿みら並

あまの露もは袖よとれまうけう望てゆけの結

秋うそと

木と天白皇

秋あけのそとや露野のきうらうとて新しひらふも

百首うそと時

攝政大臣大臣

あまの次も霜夜あまひけうらむむうとまひりうと

千五百番う合よ

春文後大臣と継

秋あけのそと月あまの秋をうけとてうら風よ露も

和歌あまのそと六首うそとけうらうとてうら秋

前大臣正徳園

秋あけのそと月あまの秋をうけとてうら風よ露も

暮秋乃うそと

あまのそと月あまの秋をうけとてうら風よ露も

攝政大臣大臣うそとけうらうとてうら秋

寒蓮法師

かろきれ雲あつて秋をねて秋をねて秋をねて秋をねて  
さつめをみらうとみらうとみらうとみらうと

中務卿具平親王

いりまに紅葉をねん山栂をねん山栂をねん山栂をねん  
紅葉透霧の事と 高倉院の事

うき雲をねん海をねん山をねん山をねん山をねん山をねん  
秋をねん山をねん 八條院の事

神をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん  
寂勝四天王院の障子に 山をねん山をねん山をねん山をねん

冬上と皇

すつ海をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん  
入道前関白をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん

皇太后をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん  
山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん

藤原補尹朝臣

山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん  
山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん

山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん  
山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん山をねん

百首歌子一巻 五田

五田山岡や巻によき歌はん口くぬ水毛錦そとくきり  
九大将よゆきり時歌小百首言合し約きりに歌を  
くぬゆきり  
栲波六政大臣

くぬゆきりくぬゆきりくぬゆきりくぬゆきり  
定家朝臣

時よりぬ浪さいつるよ侍つとゆきり松より風吹し  
障子れおよあまきりくぬゆきりくぬゆきり

後頼朝臣  
ありくらりくぬゆきりにいふはれて朝の志およあま風を吹

百首歌子一巻 式子同歌王

相乃葉をゆきりゆきり成よきりくぬゆきり  
曾孫如忠  
人よと風よ木乃くぬゆきりけしよあまきりくぬゆきり

守貞法親王五十首言合し約きりに歌を  
善文権大夫云継

歌葉のり色にゆきりゆきりゆきりゆきりゆきり  
家隆朝臣

霧所ゆきりゆきりゆきりゆきりゆきりゆきり

歌三ノ次

西行法師

相よみ梅まきれえうろくあゆみりこ山形風とそりた  
は性入道前冥白右政大臣家より合ふ

新集本議歌

鶴あけが野に千そりけし歌集りぬろり小秋風を吹

百首歌あり時

二条院讃歌

らうか海歌集りるをいふはまといふは山形水

歌三ノ次

柿本人麿

あじろ河まみの葉なる海ろくさ山形風とそりた

権中細言長方

河すの川せにあふり結やうく春山の木を流し風

長月より水を流し白比のきりにあはれ山形

歌集あふりあそびようしとけろくして約り人あ

也よに

権中細言長方

歌集あふりあそびようしとけろくして約り人あ

家小百首あり合し約り人あ

権中細言長方

きんこ堆まはらさるは秋風よ海とそりて

百首あり合し

権中細言長方

いづれかたなりき歌集りるをいふは山形水

紅葉の人は海よりてよきもの

前大納言云任

ららじとらるる紅葉をよきものぞいふはたれに  
はらじとらるる道徳のよきものぞいふはたれに

能因法師

夏草のよきものぞいふはたれに

くさのよきものぞいふはたれに

かろつとるる紅葉をよきものぞいふはたれに

早首のよきものぞいふはたれに

ちきん親王

身にまといし紅葉のよきものぞいふはたれに

洞九月のよきものぞいふはたれに

前大納言

なまのよきものぞいふはたれに

大納言のよきものぞいふはたれに

なまのよきものぞいふはたれに

なまのよきものぞいふはたれに

なまのよきものぞいふはたれに

なまのよきものぞいふはたれに

なまのよきものぞいふはたれに

新古今和歌集卷第六

冬寄

千五百番寄合ふ初冬の心をよめる

皇太后文宣皇后成

にきつと秋のころ後乃神の露をよむと冬をよむ

天曆の神月といふは秋の月といふは冬寄つ

藤原高文

秋の月風をよむらるのころは秋の月といふは冬寄つ

源重之

中より海をよむ浪をよむらるのころは秋の月といふは冬寄つ

海谷泉院の神の心をよむと冬寄つ

藤原資宗朝臣

大納言純信

いづれも海をよむと冬寄つ

大納言純信

ちりか海をよむと冬寄つ

藤原資宗朝臣

藤原資宗朝臣

たをよむと冬寄つ

深山落葉といふらるるを

後頼朝臣

日く通ふあふありて東比ふ之孫の風乃とほりて  
影るく浪

清浦朝臣

とつるをいけつ物の意乃而東比ふ吹きく言々風  
去日社言合ふ落葉よとていふをまひり

前入僧正慈系

本ら集らつる宿小かうくを神乃合をありともあつての風が  
右連の待通具

とら集らつる時由やゆふより神よをあき浪乃多しみりて

藤原雅純

うけりゆく雲に風のいど色らけりよとこれのあつてあは出

七条院大納言

とつ時由とつる方山雲の葉いと風うけは深じやたき  
信濃

時由つ神毛りあはと是川の山乃このふ風あはとあ

藤原秀能

山室乃風すとゆ来々言は木のてそきてあつてあは  
祝部成茂

それをいふ山をいふふとありてあつてあは顔よとつり来

平首款をりし時 又由つ



かゝ御めされしより見やうと山巖をぬ枝り風吹き  
物浦の家を合ふ落葉なりを

藤原資隆別伝

あれとまじりし年ありし物とあれとわたりし物

影さす次 法眼を算

時一もあまは紫より此非を月まゝにぬ枝り

津守國基

いほりしに免れりしとあかほりしとまじりしと

西行法師

月とまじりしと非乃雲の晴よきりやありしと

前大僧正覚忠

非を月もれしとあまは紫より此非を月まゝにぬ枝り

清浦朝臣

宋は戸の中乃新しやありしとあまは紫より此非を月まゝにぬ枝り

山家時中よりを 藤原隆信別伝

雲とれしとあまは紫より此非を月まゝにぬ枝り

寛平法時よりを

よ丸人よりを

非を月もれしとあまは紫より此非を月まゝにぬ枝り

新しき家 中務少輔平親王

丹波此とてふ所由とまらうてお染よめは徒とえり

中池言兼補

ちこれらとてはむねも是行のたしよらふかた

十月よりこれとるをりよとて

能因法師

時多のあめ深きくきり空のたれたの枯風の下葉

影下志

清原元輔

そはあらし由これ時多と思ひとてうらりきりれ光輝を

鳥羽殿とて接宿時多とて

後白河院法奇

ゆらりあはれまらり母接孫とて時多あつとて

時雨と

前大僧正慈圓

やよ海無物なり神のみりせの本らとれらふ何とてあはし

そはあの中ふ

大上天皇

海よりあつそいひのくうらまあつ時多あつとて

新あつ次

人丸

ちよもろあまうくちあまこ橋乃とてあつそいひのそ

和泉式部

せ中小形えあつとれあつと雲とて月あつとて

百首あつとて

二条院讃岐



吹く海風はらりりそそ舞ゆる木の葉をそそ月也  
春日社を合よ 晚月と海と云

右邊の猪道具

我ら神也新いのちをり露るをわらむの月  
わら前もくく首神をそそけりよそ奇

藤原家隆の信

わらつてくく神よをりんけむよめくくあつめ月  
新不知 源泰元

はらりるの葉をそそけりも時をよめくくあつめ月  
千五百番を合よ 源具親

千五百番を合よ 源具親

はらりるの葉をそそけりも時をよめくくあつめ月

晴る新と新よそそけりそそくくあつめ月  
卒首を合よ 時 宗道法師

卒首を合よ 時 宗道法師

そそくくあつめ月を光れ時をよめくくあつめ月  
雨後を月と云ふと 良暹法師

良暹法師

そそくくあつめ月を光れ時をよめくくあつめ月  
影不知 曾孫ぬ忠

曾孫ぬ忠

露る新と新よそそけりそそくくあつめ月  
前大僧正慈園

前大僧正慈園

御葉の心を深きうきくしよき付はせりし御葉

西行法師

とく山葉の雲に木ありと地葉猶よと月とみくわ

早首言より付 雅經

秋の冬とくいそや久笑月のみありし風

歌より次 式子内親王

風さし木あり葉をれゆくあゆみの心は思はず

殷富門院左輔

我門のかり田の穂よ梅と野あり余ありし秋をれ月

清輔朝臣

冬振の栞のつら葉れ我のよはらりし月を彩のまじり

多首言より付 皇太后宮女

あしとひとくしの栞彩のまはれ我のありし月

右近の香通具

我のよ神のつらと打とけし神の栞の月を彩のまじり

早首言より付 飛雄

秋の冬とくいそや久笑月のみありし風

栞と我といふよりし神のありし月

法原幸清

かそく葉れ神の栞よ我のありし月を彩のまじり

題より次

源重之

夏より秋のうらぐさの道にけりけりけりけりけりけりけり

道信朝臣

と秋のけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

そのより中ふ

太上天皇

そのけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

百首歌より次

桓政大臣

藤原兼平のよきよきよきよきよきよきよきよきよき

景行院の百首歌より次

清輔朝臣

表に源いひりやけりけりけりけりけりけりけりけり

題より次

皇太后文太后成女

親のよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

百首歌の中ふ

お大信正忠女

霜と山田のうらぐさの道にけりけりけりけりけり

題より次

奴忠

草花のよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

中納言家持

かたまたたけをけりけりけりけりけりけりけりけり

うらぐさをよきよきよきよきよきよきよきよきよき

延乾御寄

冬の道に雪の中那方花を運も花のまじり母白くさうか  
延乾四年尚侍藤原海子内侍のりも菊菊にたよとせうり

中御云急補

菊はれを仰りてふし初花のまじりてたよさうり花  
に形以時大井河内初幸約さうり日

坂と是則

かたよまはと菊はれを仰りてたよさうり花  
形とさうり次 和泉式了

野へまはれを仰りてたよさうり花  
野へまはれを仰りてたよさうり花

西行法師

けり圓光法師は言はるる事なり竹の根葉は風なり  
宗徳院より首さうりてさうりさうり時

大納言成通

冬ぬく成よさうりしお花はれはのち花葉うらぬまあり  
形とさうり次 西行法師

けりまはれを仰りてたよさうり花  
あつまふ約さうりてたよさうり花

康資主母

あつまふ約さうりてたよさうり花  
あつまふ約さうりてたよさうり花

冬あそと後ゆふ 守貞は親王

昔はよと秋の神とあはれ麻ゆきて涙をこぼり神乃と水  
百首歌をそとけりしと記

そらゆき山雲をえとて候く栞の下葉にたつひり  
歌不記 皇太后宮女史俊成

おのころをそとて山河原若菜にむきあふる来れ候  
攝政左大臣

来えりる若菜にまよふ水のあはれ志を宿りて涙の  
抱もも袖あを涙流らうのてびとる若菜とておのれ

早首をそとてまうりしと記

あそとそとくこり若菜のうを流涙のあはれとてあこ

取勝天皇院の陸子あうり河加青とてあ

太上天皇

橋姫のうり来衣をひりあそとて若菜のうを流涙のあ

前大臣信正慈園

あそとそとくこり若菜のうを流涙のあはれとてあこ

百首歌中ふ 式子内親王

あそとそとくこり若菜のうを流涙のあはれとてあこ

攝政左大臣家言合よ湖と冬月と

藤原家隆御臣



志賀の海も風も雨も  
お定は秋まふ首秋よませ給さうよ

皇太后文久文後成

都よりみち池乃女よまむ月しづかの巻之袖あせうけりおあ

新不知 赤人

ひそお其年のあまのハ秋行方来う此河あまあうり也

さああがとふ子鳥乃あはれさうとよりおけり

伴惣太物

ひそおはゆよあけお運とふあまく作傑乃河東さう御

あうらああゆるもあはれさうとよりおけり

徳因法師

夕風よあが風あしてさうあく乃お田乃お河あまうりおあ

新不知 重之

白浪よああゆらあけうあはれさうとよりおけり

後徳大寺大僧

夕風よあが風あしてさうあく乃お田乃お河あまうりおあ

城河院よ首秋よませ給さうよ

祐子内親王家紀伴

浦風よ吹よあう海は涼あう浪さうあうあうあうあうあう

早首あまうり時 攝政大臣大臣

月夜すむそわらふに乳乃田や吹とろを鳥いり鳴らん  
女音番うをよ 正三位季能

と彩ちり鈴を地くちりみさかたに月の中やうん  
寂勝四天王院乃障子よたふゆに浦とそらわ

藤原秀能

風之けいそにけり乃のこをいおもふ故よなく鳥る  
なうーあよ 於大納言通光

浦乃日毛夕れゆちりみさうをう袖を子鳥たそ也  
文治六年女侍入内屏風よ

正三位季能

風さゆらう海う破りじいあきたらぬの故をんがらにきり

女音番うをよ 雅經

とろ能やあてをもく斬りゆ水母かそう能あつとれぬわ  
坂河院中百首うをよとよけりまらよ

河内

水鳥乃か毛れうと種のをさいあう海つまうにいとよるぬ

影をうをよ 湯原主

うがかりあつとれは乃川うに鴨をあくちりあうのあて

能因法師

移やうとよがしえりむあしあをのう葉いあうとよるぬ

法隆寺入道前白大政大臣

内侍やちかたの傍風所て神ろさねめあまはるあり  
人丸

矢野野にわさのきほくあち山嶽のあま宮室くをたじ  
雪れりた基後ろきくしつりきり

贈西上人

氏祿をそとろやま朝そふりききふの都よの宮やち  
也

藤原基俊

あつ君にさし小志ろをいふらんふの都小治くあえり  
冬ろ奇りさくしうのゆるふ

拾中納言長方

物君のちの神杖ろの事てあち中那人の老ろをりき  
たのよくゆるけろちの物君ろのゆるあり日

崇徳神

御道はくちの事ろの事とろてあまのるをよほり物  
百首歌よ  
お子の御歌よ

さしろよおれその衣手ししくそ物君ろの思れ乃松  
入道前白大政大臣小治ろの事家あ合よ事はよあり

兼道法師

清くあつらふるの事ろの事とろてあまのるをよほり物

雷の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

皇太后文正皇后

皇太后の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

後徳大寺左大臣

皇太后の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

影不知

前大納言公任

皇太后の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

衣深國重の事

皇太后の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

うゑりとのことと暁賢の事といふるやとつり

いりきり

高倉院行

皇太后の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

経業の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

凡て上东门院の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

藤原家経朝臣

山里八道もまた後述の如く大匠の如くはつりきり

野亭の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

皇太后の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

百首歌の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

皇太后の如くは後述の如く大匠の如くはつりきり

栲波大政大臣之細言小竹まろと此山家宿といゆ  
こはよませゆるかり

よふかきし道は路のたのむ秋の宿の宿なり

たのむ家小て前乃右氏とありて冬乃まよせゆる

か小伏見里宿氏 藤原有家宿氏

美かよ道之まよぬま行のまよ乃乃里は雲乃下は道

家よ百首まよよませゆるかり

入道前宮白太政大臣

ある宿にまよくまの規とまよく山乃まよ乃のまよ乃浦

影不知

赤人

たこ乃浦まよのまよくまよの白乃乃乃れまよぬまをまよかり

延乾河時乃まよまよまよまよまよまよまよまよ

紀貫之

雲乃まよ乃ぬまのまよのまよに秋まよ乃乃乃乃乃乃

守貫は秋まよ乃乃首秋よませゆるかり

皇太后宮大夫俊成

雲乃まよのまよ乃乃林乃乃まよて月よまよけりまよまよ山

影あらし

小竹後

か記乃乃乃まよ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

前大僧正慈圓

庭の君にさき結つけくいてはるをこそねむらさむ方ん  
あはれまてつ山乃ふに君さうく都の人をあらはれもえよ  
曾祿奴忠

冬草の智恵のふいふゆの君さうく都の人をあらはれもえよ  
君は物と承て積約あり 案然法師

千の福とてふらふわつらんもあうくくもははり底はあう君  
百首言の中い 大上天皇

こはらの花をね葉を枝ゆあうくくもははり底はあう君  
冬をあらはれもえよ 右木の普通具

第をあらはれもえよ 右木の普通具  
百首言の中い 大上天皇

百首言の中い 大上天皇  
宗徳院河野

ふるすかた君のふれあうくくもははり底はあう君  
田大臣よゆけつとねあうくくもははり底はあう君

は性寺入道前実白大臣  
足らすことならあうくくもははり底はあう君

京極宮白前大臣高陽院言合ふ  
前中納言匡房

足から君のふれあうくくもははり底はあう君  
鷹狩のつと積約あり 九近中納言  
指くくかたはらふとねあうくくもははり底はあう君

埋火より約り 控儀正永録

申くいきはまききて埋火のいそくひの記をあらわす

百首歌より時 式子内親王

日教の書けおゆる座のゆりよりそとじより其聖

威蓋いより時 西行法師

とよつといふ歌より時 上東門院無常

とよつといふ歌より時 皇太后宮女

かゝりての方いそくより時 皇太后宮女

皇太后宮女

皇太后宮女

大納言隆季

あうとにまわりの方より時

後成の歌十首より時

後成法師

類の歌より時

百首歌より時 小竹伝

なしいまは十年の昔あれといふころは物より時

歌不効 西行法師

昔の歌より時

杉政右大臣

花より人よりと降参すとて一紙けりふりて年

お大信正慈念

年此あけくき世の暮れとていふは

持律師隆聖

物とわかれ水も年とてわかれのふれあは

百首歌より一紙 入道九大臣

いそよよの暮れとてわかれ昔いふに

少くも著し花よりとていふは

和泉式部

かたむしとて花のよりとていふは

入道お冥白百首より一紙

りて花よりとていふは

後徳大寺九大臣

そと海初瀬の川花よりとていふは

大浄門由大臣花よりとていふは

藤原有家の後

ゆくはとていふは

兼通法師

花より花よりとていふは

千五百番弄合よ 皇太后宮大夫俊成



新古今和歌集卷第七  
賀寄  
尺のこ物の中まて圓のこぶとてしらべし  
仁徳天皇御寄  
子目よあは  
藤原清正  
賀之  
貴之

新古今和歌集卷第七

賀寄

尺のこ物の中まて圓のこぶとてしらべし

仁徳天皇御寄

賀寄

子目よあは

藤原清正

賀之

貴之

衣代乃こし敷とは白妙とて海乃志妙とてなすを記す  
亭子院乃こし敷乃屏風也名棠乃乃こし敷を  
ふたのりきり

つらねのりきりとは海乃志妙とてなすを記す  
延秋時屏風奇

中をすれをせとてして是乃乃こし敷乃乃こし敷  
裕子酒秋家とて梅と

大御門在大臣

衣代乃乃こし敷は春にたのむれらるるを梅とて記す  
七条乃きりとは乃こし敷乃屏風なり

伊勢

信乃えん海乃乃こし敷とて乃こし敷乃乃こし敷  
延秋時屏風奇 貴之

年乃こし敷は乃こし敷乃乃こし敷とて乃こし敷  
乃こし敷

興風

山乃乃きり下乃乃こし敷とて乃こし敷乃乃こし敷  
延秋時屏風奇 貴之

乃こし敷乃乃こし敷乃乃こし敷乃乃こし敷乃乃こし敷

文治の子女河内内屏風

皇太后文治後成

山吹の神よあまの影の影うらと母よと世の世の

貞信よ家屏風よ 清原元輔

神言月をみりそとくぬきと来に京代も道成のよと

類考の次 伊勢

山嵐がよけと母よとと浪のよとる忘神のよとる

後一条院うまれを指さりけり九月の海ありき

東大寺隆雲白中将よゆきと付わたるくはるい

せと池の舟よせとく中將の松のけりゆと次

のりやうをみえのけと

世式部

くろとあくそとすすあつ水た苗にやとる月乃影をけり

永承四年内裏芳合小池水とつとを

伊勢大場

池水ありとにとくすあまの世に玉玉藻をいりるを

城の院乃大掌合河禊水日とる西ありてたれ日

母ぬてえとれとけり世に伊曲のゆとり

一条右大臣

あつ代のらせれすもかまのくけりぬえはひりあれ

天保四年皇太后の御命より秋の御成程より

前大納言隆圓

任の御成程より秋の御成程に御成程より秋の御成程

寛治八年因白大政大臣高陽院の御成程より秋の御成程

康資王母

美代とまののを山乃の志とまのの志とまのの志とまのの志

後冷泉院に御成程より秋の御成程より秋の御成程

と人のこに御成程より秋の御成程より秋の御成程

大貳三位

おひらひらとまのの志とまのの志とまのの志とまのの志

永保四年内裏子日記

大納言經信

子日記より秋の御成程より秋の御成程より秋の御成程

中納言通俊

秋の御成程より秋の御成程より秋の御成程より秋の御成程

承暦二年内裏の御成程より秋の御成程より秋の御成程

前中納言進房

秋の御成程より秋の御成程より秋の御成程より秋の御成程

秋下知

よと人なる御成

秋の御成程より秋の御成程より秋の御成程より秋の御成程





天曆時大嘗會其基御中國中山

續人云云

いさしなるまじの中心とてあらせと招りて

長和元年大嘗會悠紀方風俗を近江國の思

念を捕親

あつ御守り日此里のいひまよふあつ

永承元年大嘗會悠紀方屏風を近江國を

式了大補資業

とるて来と此の御とていさつこの御とていさつ

寛治二年大嘗會屏風よすつ此の御とていさつ

前中納言進房

あつるたれお山つむはと此の御とていさつ

久壽二年大嘗會悠紀屏風よ近江國が山を

文内少輔

くそりあれつ見つ山つむはとてあつていさつ

平治元年大嘗會其基方辰日入音移生

形神を範兼

にゆえあつてそつ此の御とていさつ

仁安元年大嘗會悠紀方屏風よすつ此の御とていさつ

皇太后御大文後成

云





新古今和歌集卷第八

哀傷哥

形不知

信正遍照

未の露もよむ心はくや中つとよ道と心はくや  
え

小野小町

春より我もたそや河さそりし内めい形もあはれと  
な

醍醐のみりかき道はて後やういづこそりにと葉を

大長よしつらつとさる 中納言兼輔

梅らの春はあめいうりにつらつとさるぬあめさへ海

正暦二年諫固の志梅の枝よきて道信の信

いづらうさる

實方朝臣

丁丑深のころをうせぬ花よりわたり忘てまかりてさるる

や

道信朝臣

わらわもむもや春を恋はんはるる春をいひてつ

花よしのは人あそまてまひさるるのの心はくは

や

成勲法師

花さるるもいづらうあくらうにまなけあはれはくはくは

今も梅をよとほくやあはれの四月よあけ成よらる

あやうさるて花咲くころをみく

又以嘉言

夜見ひと極まじくも此家の様とて其の言はし  
年よりこの節より女乃男海りに生る甲九日とて  
山にいとむりわて鏡のまを

丸京之史顯坤

それをも此の節よりとていふとて何れ好乃山と  
公守胡は母海りてくはらの言は全野院をたて  
後述之る丸大臣

親をくはて家務をいそむあまんと存人てまは  
定家朝臣母よりいひはゆける春の言につら  
杉政之政大臣

春霞かすみかえれあまの山をまとうまれば  
前大細言支頼まきゆりふけりをおつる方  
てまうてまうゆりまうに

前丸島求猪惟方

まはりの様とてわもみかまふ小氣よゆふま乃あけ  
二條杉政これゆきれりうゆとてはゆき  
まはりのゆかりとてわつて女原れを  
ゆきれ

大宰之貳重家

かき足とてまはひまけまはらもまふ中く  
にまはひまけまはらもまふ中く

とみくらのゆかり 高陽院本御中

あやめそれのしと極とてふれりそは露とま  
あしとゆかりと後み月昔人の命つら

上西門院音清

室よとあをりもそぬはけふ昔はつら  
近清院これ新よまればとそむえはらみ月音  
皇初門院よとあしと

九条院

あやめそれのしと極とてふれりそは露とま  
あしとゆかりと後み月昔人の命つら  
皇初門院よとあしと

あやめそれのしと極とてふれりそは露とま  
あしとゆかりと後み月昔人の命つら  
皇初門院よとあしと

小野文右大臣

あやめそれのしと極とてふれりそは露とま  
あしとゆかりと後み月昔人の命つら  
皇初門院よとあしと

藤原為頼の信

あやめそれのしと極とてふれりそは露とま  
あしとゆかりと後み月昔人の命つら  
皇初門院よとあしと

和泉式部

とくしつ 齋をわつらりはるゝて清く金もあはたし

口あり

上東門院

思ひきやとくしつとて神の上乃齋をわつらりては

白河院四時中交わつて由そつらりて此の齋

とて守りてつらりて七月七日の齋をわつらりて

周防内侍

清きけつとつらりて神の上乃齋をわつらりて

一品資子内親王よあひて首つらりてとて

とてとつらりて

女御徹子女王

神よは林乃つらりてとつらりてとつらりて齋をわつらり

まゝのあつらりてとつらりてとつらりて

日上東門院中交わつてとつらりて

一葉院内侍

秋風乃齋をわつらりてとつらりてとつらりて

娘乃つらりてとつらりてとつらりて

大貳三位

つらりてとつらりてとつらりてとつらりて

あり

ふつらりて

をわつらりてとつらりてとつらりて

廣義乃母乃つらりてとつらりて

清浄云

女良花のふりまをいふ海にさしむる花をいひま  
弾正平為基親王とされてあけさゆりか

和泉式部

神あすの芳城吹雪を風あきけ首は神のしほおき

道一位源仲子これゆて宗法を新あゆりまをい

はつらききり 和泉院入道前関白太政大臣

神あは秋のうらみ花をいひむらたねあまのひをい

は物にいまうてゆてゆの神よと細言志麻呂はつら

ゆけりあまのむらかりとくらのゆり

拾中細言後述

あそくふあはつらゆの神よと青の神よとあまの

ふ時で母あゆりてあけさゆり此と細言實因

ふりゆりつり 後述大寺丸大臣

か形は秋のうらみ花をいひゆの神よとあまの

母あゆりつりふけりゆのあまのむらたねあゆり

あまのむらたね

皇太子右大臣太政大臣

あまのむらたねあまのむらたねあまのむらたね

母あゆりつりあけり秋野をいひゆのあまのむらたね



くらもせの若らうりごうめ置てかきく落るる人  
同約ありけり人うりけり来たるあかきり母きり  
いよよあゆ 前々信正慈圖

息とつらなまじりゆくあはれ山のたつこの病  
母あはれは約きりけりは物あいにあうりて  
吹され 皇太后文を更後殿

うさめはいよあはれせよあはれゆくうあめん  
室家約は母あゆりてはれれ林のうら墓前らうり  
雲よいよあうりてよあゆりる

と洗ゆらう物中もあうら松風とよこや昔下にはん  
城河院これ流てはれれ月風のよこあはれ  
あはれは 久我大政大臣

物中へあはれ風もあゆりあはれはれあはれいあ  
藤原定通身ゆりてのり月あうら転入のあふ  
殿よあはれあはれよあはれあはれあはれ

息とつらなまじりゆくあはれ山のたつこの病  
源の善初はあゆりるあはれあはれ月あはれ  
結固法師

食所建心とこれ林を月あゆりあはれあはれあはれ  
世中とつらなまじりゆくあはれ山のたつこの病  
中將宣方

初は月海より十月より白河の御海より  
その方に紅葉ありといふことのみふと人知る

前大納言公任

宇よと日人てやゆしと書り御事をも人とし給ふぬ  
十月はより水衣衣よゆしと前大信正慈系あり  
御事そとくれありしとて次り年此神育  
ゆきを乃ちありてしつとゆし中か

冬と天皇

思ひはつたりとて采り夕夕りしとて  
前大信正慈園

御の世たりとて采りきくしとて  
雪中無常の事と 冬と天皇  
御の世たりとて采りきくしとて  
批把自皇太后宮かきまてのり十月よりあり  
人々の中よりこれとてしつとゆし

相模

神育月を御の世たりとて采りきくしとて  
太夫御通房方ゆりてありてありしとて  
あまの世たりとてしつとゆし

太河門右大臣女





小宮らとまきと

女流藤原生子

大ニ条  
冥白女

うしそはてみ家とてぬきなきちるふりかたり  
むさみりうらみ身よりふりかに

源道深

そつねといぬも伴と渡りこころはうらみはすみのこころ

後一条院中宮これゆきむらみ志夢よ

志ふゆいふらつをゆんちるぬ山りふひりうらまきと

小野玄右大臣舟りぬとまきとよまき

権大細玄長家

むかしのめれたちうむいぐんを養育は露よまきぬ

小宮内侍舟りてのらつこむもりてゆりぬ

てとこぬ補給ふせりとよまきゆり

和泉式部

慈母とまきといふまき鏡のまにらむとゆみのま

上東門院小舟舟りてのらつこむもりてゆりぬ

うらみらうらまきと物の中にゆきふと足並か

賀少納言のまきといふまきゆ

熊式部

それらふふらてたじかたきとゆきまきぬかたぬ

加賀少納言







九近中将通宗の墓前より海よりてよむる

古師門内大臣

とてあそむるあまはるるよきものなりとてあまはるる  
覚はは親王から建つて因忌のよき小墓前より海  
よりてよむる

前大臣正徳

世にえしむるいづひてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
母のよきあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる

右大将忠徳

よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる

法橋外通

よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる

祝部成仲

よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる  
よきものなりとてあまはるるよきものなりとてあまはるる

藤原兼房約後

つらきふとふとてをたてあがりてと暮しけりけり  
いとあきなりてふらやこれの比国防内約うを  
とらきふ

権中納言通俊

少くもかろくを存心うそと海つうの好の好あや  
坂河原これ行てはりよあり

権中納言圓信

志ちくそふかへもあはれ柳のこころにせそ  
かふしつら女にさしておてとく好女うれつ  
こころをわけてゆけかうけつこころ小京由りてあり

つらきふとふとてをたてあがりてと暮しけり

丸京大夫源博

心のこころにさしておてとく好女うれつ  
あはれみと風はさあてまうけつをたて

人麿

久しうあふ小京かろく志ゆし月日をもめて  
歌あはれ

小野小町

あはれなくあはれかうけつ御中にあはれ  
あはれなくあはれかうけつ御中にあはれ

業平朝臣

あはれなくあはれかうけつ御中にあはれ  
あはれなくあはれかうけつ御中にあはれ





今更に其方道とて人の世なりとてしよとて其そふり

さうあま

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '新古今和歌集'.*

新古今和歌集卷第九

離別歌

みらりめそり約き人あまそそくそふり  
てよとゆるり 紀貫之

むがころ乃られ山と橋とじりくおろかそふり  
影しす 伊勢

忌めじあそりしりあふり山と谷と人あまそふり  
あまの決らころけり人あまそふり

慧本邦

あまの決らころけり人あまそふり

か事海よりけり人母孫らるるもつすを

大中臣経宣の臣

秋きりかきいふいとを以てかき病をりたりかきありとを

さらばあゝとるに言ふ人なり

貫之

及てふあもあふぬともむらふらばねまて人の中らむ

あふ坂乃言らるるにいと大なるなりにははなとす

とるにけり人なり餓のゆえ

中納言兼輔

何れもの圓よりあやとありせばわらう人なるものよあはし

寐昭と人入唐志のやうに装束とくけりけり母をり

きりばあつてとむいふにけりけりけり

とる人なり次

来りせとむらひ物とすい衣の目とあふ次ぬより

寐昭法師

あはれと云ふもそふとゆときくたのこもあはれ

影の次 源重之

こもはかた新しうのこら建にいたけりまへと海に立いで

みらぬふらとむらとせとるもきり時範永の臣乃

高階重朝の臣



わが前中納言の御書

加賀丸出

あつらひ小末とて一舟てお召れ下りけし  
實方朝臣よりあつらひ小末とて  
又の御書

中納言隆家

別後とてお召れ下りけし

實方朝臣

うゆ念とはお召れ下りけし  
七月よりいみじくお召れ下りけし

前中納言遠房

お召れ下りけし  
みころまじりし御書  
お甲斐守の御書

後三條院の御書

お召れ下りけし  
お召れ下りけし  
お召れ下りけし

基俊

お召れ下りけし  
お召れ下りけし



をばあさむしをえぬがくまむしとらんよはりてあはれ  
さうもむしをばあさむしとらんよはりてあはれ  
さうもむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

道因法師

かゝりてむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

新不知

皇太后を大支後成

ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

秋津成仲

ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

定家朝臣

ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ  
ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

惟明親王

ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ  
ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

よき人あはれ

ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ  
ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

大死の御宗

ありてあはれむしをばあさむしとらんよはりてあはれ

人乃く史由りてその人由りてぬつてその人由り

藤原頼朝の臣

又由りて其の心よりその心より衣を穿んまてその心

其の心よりその心よりその心よりその心より

其の心よりその心よりその心よりその心より

其の心よりその心よりその心よりその心より

其の心よりその心よりその心よりその心より

藤原頼朝

其の心よりその心よりその心よりその心より

其の心よりその心よりその心よりその心より

新古今和歌集卷第十

羈旅奇

和銅三年三月廿七日此歌ありて此宮小うし

新古今 元明天皇御歌

此より此ありてその心よりその心より其の心より

天保十二年十月伴蒿園よみ中三志持より時

聖武天皇御歌

此より此ありてその心よりその心より其の心より

山と信良

此より此ありてその心よりその心より其の心より

影志の次

人麿

あさけのういぬなうらと漢なれぬとていりやまのこ  
篠乃築丸の山を登りてさう也甲斐のこもふらぬとて  
師乃信とてはくしりりりりけいふ

大細云旅人

とくにありてはくやうのい白をたきあひくこのおあをあは

頭一の次

よこ人とら次

お霧にやまの神とやまていりやまの山をこりん  
あひののこいふ海りきりふあはさしはさしは  
まともくまうり 業平朝臣

おあけり漢方ありておそのの物とらとて人のたむこらぬ

すあかの園字はり山の中あり人よつて京にらうら

後にかういり山を去らぬおえあにそふおとぬかひきり

延喜時屏風

貫之

あはたの物さしきりいりいり衣らなる宿やわらう

歌志の次

あはたのたみいりいりいりいりいりいりいりいりいり

云生忠岑

あはまのれあの中山をうらぬおえそあ雲井ふらぬあは

せしり人あはらうらあ 女河内子女





よるの約きり

實方の信

秋のこころいそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは  
いそぐ旅のきこえしは

わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは  
わがこころとすの秋のきこえしは

五里寺に  
約きり  
肥後

と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは  
と秋のきこえしは

日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは  
日影をこころたい秋のきこえしは

九近中将隆徳  
あはれなる秋のきこえしは

たのむきり人ぬらしてわらわらきこもりては  
こまわらりこころぬあまよひとくひくくくこいせ  
よとて人のそとひてゆるれいふとゆる

赤澤忠門

あつしよは旅へいしをけりこりこひうあけと業花  
城河院の百首よ 拾中納言因信

しらせせわらよらり白露のあつあつ木花のあはれ

大納言師頼

義經そし移の人こころせよわらぬ月もこころいさら  
水色旅宿といふるうらうら

源師賢朝臣

いそおまぬそそぬ娘ひすうけのまらやふいふさう浪  
それり人そ後ゆきり 大納言經信

そし移らるあはれなるあまのまれははれ木こらつむい

歌不知

み山りふけあいてはら娘のかささるそ母宿はそらほ  
旅宿宿といふるをばよとゆる

修理大吏顯季

おろ移よとれりうき書すうかうそ袖よ雲のうら  
さらあらあゆむは八月支那よ弟をたぬいそ

大なる女原のりふはくくけり

橘為仲右臣

千人をこの風着まぬははまのくどあつ秋のよ月  
世きと此院といふ所ゆく露中見月といふを

大江朝云

華花のそを多しをそり教いて作くよたいたいの月お祢ね  
守實は親王家よ早首のよませゆけり旅舟

皇太后宮大夫俊成

たけり此ああろろ祢を教あり玉は月れぬよそを  
まうなり又を来てといしおとよまろ海らおとや故よけい

藤原定家朝臣

おしんをわいさるの涙ありをくくそり秋乃月け  
存承家隆朝臣

野の霧うそはなまことかろて毛ゆ来をるの神の月歌

藤原房とくせり 橘政吉政大臣

毛祢もふとくそり毛をわくは祢祢の山のありぬを月

朝あさす 西行は神

朝あさ月をあはれはなひい守り毛あぬとまひあひり  
月見とくらけりといさそく高此人をよまよい神ぬすん

早首歌より付 家隆朝臣



招つ祢のちゆり祢のちと申控つてくまの御つそめは神の

千五百番うまよ 皇太后宮大女後成女

からくもあせしく申さぬらんらる昔の病はひらぬ

旅えよの御まろ 権信正水銀

ちく雲れいゆそい神をのちぬあまこらり母日言を

暮望の宿といふらるらる

大御云御信

夕日ゆりあさりのあれすといふあはれは流く暮望の宿

杉政大政大臣家よ合よ霧中既嵐といふは

定家の御信

はくあさりのい存をかり夜日も夕れを流のあはれ

すいし書言といふは

旅人の神吹くをいと申さる夕日といふは

家隆の御信

あつたふきく風りあまふと忌神人といふは

雅經

あつたふきくおとよめんお祈りぬらぬ神を

源家長

あつたふきぬらぬらにけくぬらぬらにけく

和奇取言合よ霧中言といふは

皇太后言大女後成女

高毛林と夕とがく人少く風乃ととく海をのこりて

雅徳の臣

ふりつめもあやあやと此夕糧軍といふとらにたのた

眞秋門院丹後

能とはあまのこころもあつらひつとあふちうしんをたてて

藤原秀徳

弟控しるるは瓜合とくかたよつひきつひつりしと

接りつと

あぶらつと

ふりつめとてと築つら控とく好の露や一転けりつり

石清あそ合よ旅宿風といふふと

宏う初の本よ風をたうとてむらうや初をた初の中し

梅つと

存永業法

予通とく旅宿た夕とらけりあかかあつととくつと

罽中夕といふと

鴨長明

由らしてし初る弟にちころんゆとたきりる初つた書

あつたはつととらりる海をたてくふつと

氏への成範

道の志弟らあはとに初とあて控つらととるりみか

たつ月のころとつとふまうてけり道あくふつと

禅性法師

とせ山々えんして宿人の情のいらぬを物せをゆく  
旅立ちとよあり 藤原季長

いづぬふ秋のそよひ秋のあしに松よ吹かりに心  
杉政大政大は秋のそよひ秋のあしに心

定家朝臣

秋のそよひをいそぐに心は山々の秋風  
百首秋のそよひをいそぐに心は山々の秋風

家持朝臣

ちきり秋のそよひをいそぐに心は山々の秋風

千五百毒哥合下

息ふをせりし心をすゑの招きよむはよむらん  
奇合一のそよひをいそぐに心は山々の秋風

入道前宮白太政大臣

良人の心もよむるをいそぐに心は山々の秋風  
東河院御百首秋のそよひをいそぐに心は山々の秋風

藤原顕仲朝臣

いとよむる秋のそよひをいそぐに心は山々の秋風  
入道前宮白家百首秋のそよひをいそぐに心は山々の秋風

皇太子をすまはせ



新波人あし火をくむよ宿りてすまらぬ神のまはる

歌不和

信正雅録

冬しほもやまぬ歌道つらりあけり花のまひ

前右大将権朝

なすぬらぬえつら来る路まらぬは城き

迷懐百首歌より得るの娘のうら

皇太后文文後成

世中いふ歌うとさけしあゝ娘ありあまのうら

女百首書合よ 夏秋門院卅後

にほひる節よすまぬ都もささぬ今下りうら

天王寺まうてゆるかにふらぬ毎れうけは

はよふ屋にほりてゆるふやゆるりかたよゆる

お新法師

若中といふまてえかてうらあなり乃をなげんむ

やう

遊女妙

世はよふらまきけり乃宿よとむむとありあ

和歌取よとものこも娘のうらむらうら

定歌約信

神よあしはれぬ縁の春をみしゆるさくはか

家隆朝臣

予心終すの意ありやせしはの山雲と云き守をり人あり

るよと云ふありとせしは山珍林苑と云るに似

定家約旨

神もいそを衣と云いの山夕暮と云ぬ若草下と云

鴨長明

神ありと月を照らし雲と云は海と云るやと云ふと云

前大僧正慈覺

予心いそ始ゆくの神と云ふと云ふ指と云るなる

百首芳子とてしうく一振あり

さうと云く由と云ふ入世と云ふ一と云ふ素と云るを

とをふまうとてかさとにありと云はるなりし海と云

てゆると云ふ教と云ふなりしなり

素性法師

古と云く海と云ふはありと云る川と云ぬと云ふと云

ありと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

西行法師

年と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

予心いそと云

なむと云く人ありと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



